

水稻の作柄に関する委員会（令和5年度第1回）の意見

1 気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 5月以降、全国的に、気温は平年並みからやや高く、6月中旬以降、東日本を中心に多照で推移したものの、6月下旬から7月中旬にかけて梅雨前線による大雨や日照不足となった地域もあり、九州北部などでは線状降水帯により局所的に記録的大雨となった。

その後、全国的に気温は高温で推移し、特に北日本・東日本では記録的な高温で推移した。中でも、東北日本海側から北陸にかけて7月下旬以降、少雨やフェーンによる記録的な高温となった。また、8月上旬の台風第6号や8月中旬の台風第7号の影響などにより西日本太平洋側を中心に大雨や日照不足、9月上旬の台風第13号等の影響により一部地域で大雨となった。

なお、今後1か月程度の天候の見通しでは、気温は高く、日照時間は平年並み又は少ないと予想されている。

- (2) 本年の水稻は、田植期以降、おおむね高温・多照で推移し、出穂期までの天候に恵まれた地域がある一方で、6月から7月にかけての梅雨前線や8月の台風による大雨、日照不足等による穂数・もみ数等への影響や、7月から9月にかけての高温により登熟・品質等に与える影響が懸念される。

また、大雨による冠水等、台風による倒伏、フェーン等の影響も懸念されるほか、いもち病、斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想される地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 全国的に6月から8月にかけて高温・多照で推移した一方、地域によっては大雨、日照不足等で経過した時期もあることから、生育ステージ、肥培管理、栽培品種等の違いによる穂数・もみ数等への影響を見極める必要がある。
- (2) 梅雨前線や8月の台風等に伴う大雨等による冠水や倒伏、7月から続く高温、少雨やフェーン等が発生した地域では、登熟・品質等に与える影響を見極めるとともに、今後の台風や大雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (3) いもち病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況にも留意する必要がある。

【参考】水稻の作柄に関する委員会委員

(座長) 雨 宮 宏 司	公益財団法人日本特産農産物協会 理事長
大 川 泰一郎	国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院 生物生産科学部門作物学教育研究分野 教授
萱 場 互 起	気象庁大気海洋部 気候情報課 予報官
齊 藤 邦 行	国立大学法人岡山大学 学術研究院環境生命自然科学学域 特任教授
山 岸 順 子	元国立大学法人東京大学大学院教授
吉 永 悟 志	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中日本農業研究センター 転換畑研究領域 領域長
吉 本 真由美	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構農業環境研究部門 気候変動適応策研究領域作物影響評価・適応グループ 主席研究員